

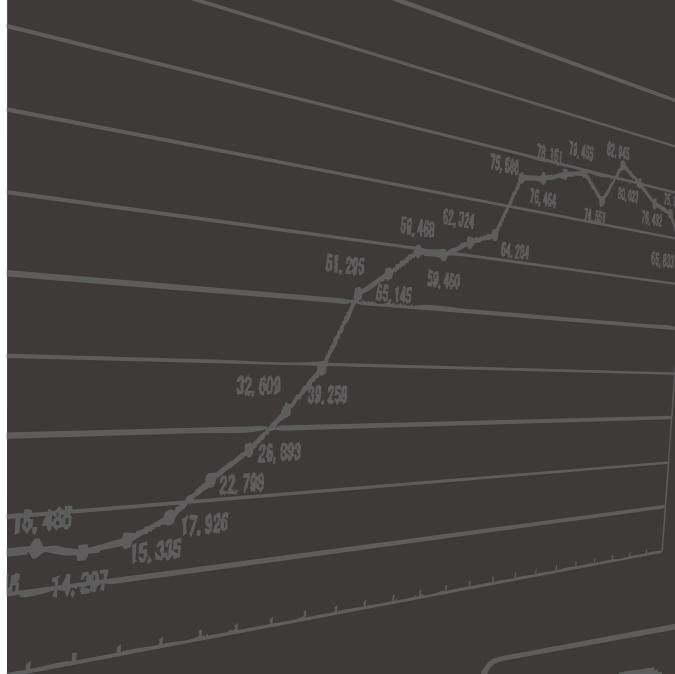


| | |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 第2講 若者の内向き論について |
| Author(s) | 福田, 州平 |
| Citation | GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 19-28 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/48322 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



【第1部】

イントロダクション



ギロチン

革命軍
公安部
委員会

反革命

裁判所
革命

第2講 若者の内向き論について

1. 若者の内向き論

おはようございます。第2回目の授業です。前回は、文化の一義的な定義の難しさに触れつつ、文化と呼ばれているもの、あるいは含まれているものについて、どう読み解いていくかのヒントをお話したつもりです。ちょっと難しかったかもしれません、前回お話したことは、姿を変え、形を変え、コトバを変えて、この後にもちょくちょく出てきますので、おいおい分かってくるのではないかと思います。

さて、前回、最後にアンケートを実施しました。こんな設問でした。

ここ最近、「日本の若者は内向きだ」と、メディアが取り上げたり、評論家が指摘しています。日本の若者があまり海外に行きたがらないといわれているのです。こうした「若者内向き論」について、皆さんはどう思うのかについて、長文でなくて結構ですから、お答えください。

今日は、昨今よく言われている「若者の内向き論」について、あれこれ考えてみたいと思っています。2010年7月25日の朝日新聞社説は、「世界は君を待っている」というタイトルでした。その内容を簡単に要約すると、こんな感じです。——海外への日本人留学生が減少している。「外国のことはネットでわかる」と、あえて異文化の中に身を置きたがらない若者が増えていると関係者は話している。若者を海外に出て鍛えようとする意識が社会全体に薄い。大学の進学から就職まで、つまり入口も出口も国内にしばられているなかでは、内向きな若者が育っていくのも無理はない。世界の議論に加わらなければならぬ難問は山積みだ。日本の若者が閉じこもっていていいはずはない——。

いかがでしょうか? このところ、海外留学プログラムの募集をしても、学生が来ないと、あるいは企業でも若手社員が海外赴任を嫌がるとか、そんな話を直接間接問わずによく私も聞きます。とりあげた朝日新聞の社説は、典型的な「若者の内向き論」といえるものです。ところが、これは本当のところどうなのでしょうか。今回は、前回みなさんからいただいた意見なども交えて、この問題を考えていきたいと思います。

その前に、私自身の立場を明らかにしておかないとフェアーじゃない気がします。私自身、現在、大阪大学の国際化を担う組織として設立されたグローバルコラボレーションセンターに所属しているということを差し引いても、みなさんにもっと海外にいっていただいて、いろいろな経験をしていただきたいと思っています。外の世界を肌感覚でつかむことは、結構重要なことだと思っています。また、外から日本を見るということも、非常に大事だと思います。私は中国研究者というわけではないんですけど、よく中国に行きます。実際にやってみて、中国にいる人たちと話をすると、日本の報道やネットで流れて信じてきた中国像がかなり揺らぎます。報道やネットでは、きわめて一面的なところしか切り取っていない。にもかかわらず、どういうわけか、日本人は中国人を「よく知っている」と思いがちで、インターネット掲示板なんかをのぞくと、「中国人はああだ、こうだ」と、かなり一方的な見方しかしない。ですが、そもそもこの「中国人」という概念それ自体が、すごく不思議なんです。たとえば雲南なんかに行ってみると、多くの少数民族がいますから、統一的な「中国人」という見方、それ自体が揺らいでくるわけです。もっといと、「中国語」という概念それ自体も、一体何なのか。いわゆる“普通話”と呼ばれているものだけが中国で話されている言語ではありません。広東語、モンゴル語、ウイグル語、チベット語、福建語、客家語、ナシ語などなど、いろいろあります。さあ、「中国語」とは、いったいどれを指すのでしょうか？ こういった文字によって得た思い込みを壊して、新しいものの見方を得ていく体験は、現地に行くことでしか味わえません。

とはいって、内向きの人だといわれる人の気持ちもよくわかるんです。僕も本当は内向きな人間です。狭い飛行機に何時間も揺られるのは、好きではありません。メディア報道とネットで海外のことはだいたい把握できる、という人の考え方わかる。今までこそあちこち行っていますが、学生のころはけっこう内向きの考え方でした。もっといと、私自身に“コミュ障(コミュニケーション障害)”ぽいところがある。しかし、馬鹿を少しだけみなさんより重ね、言わわれていることと実際とのギャップに何度も出くわし、「百聞は一見にしかず」というよく聞くことわざが、まさにその通りなんだということがわかってきました。

かつてのように最先端の研究を学ぶために留学するというタイプの方は、少なくなったことでしょう。だけど、海外で学ぶということは、「最先端の研究」だけではありません。違う環境に身をおくことで、なんとなく見えてくる別の視角とでもいいましょうか、感覚といいましょうか、そういうことが、今後実社会に進まれる方にも、文理を問わず研究をされる方にとっても大事なんだ、しっかり形にはならないかもしれないけどのちのち生きてくるんだ、そういうことを申し上げたいのです。

2. アンケートから

では、本題に入りましょう。みなさんのアンケートをすべて拝見し、そこから、次のように論点をいくつか拾いだしてみました。「インターネット・メディア」、「日本人・日本社会」、「不況」、「データ」、「不安」、「語学力・コミュニケーション力」、「若者」の計7つです。この7つの論点を軸にして、若者の内向き論について考えていきましょう。

2.1 インターネット・メディア

まず、インターネット、メディア発達の捉え方についてです。インターネット、メディアが発達すると海外への関心が薄れるのかどうか？という問題です。みなさんからいただいた回答のなかで、インターネットやメディアの発達と海外への関心についての関係についてふれたものがありました。その関係性については賛否両論でした。一方で、インターネットなどの発達により海外の情報が手に入りやすくなり、日常生活でもそういった情報にふれる機会があるので「どういった所なんだろう」というような気持ちが薄れてしまうという説がありました。他方では、インターネットなどが発達したことで、人々と交流・関心をもつ人も多くいるはずだと指摘し、仮に日本の若者の中にそのような人々が多くいれば、決して「内向き」とはいえないのではないか、単に海外に行きたがらないという点だけにおいて「内向き」だときめるのは強引ではないか、という説もありました。

ここで、インターネット、メディアについて気をつけないといけない点を補足的に申し上げたいと思います。インターネット上の情報の多くは英語で提供されているという事実を忘れてはならないということです。何かを専門的にしらべるとき、英語の情報に当たらざるを得ないということが、よくあります。あるいは、非英語圏の情報だったら、その言語で提供されているインターネット情報にアクセスせねばならないこともあります。ですから、日本語のみで海外の情報を得るには限界があるということです。

もうひとつ、メディアについて。国際報道に関して、メディアの情報量はきわめて頼りないものです。新聞の国際欄は、本来たくさん的情報を扱うべきにもかかわらず、一面から二面ぐらいしかないように。そして、「マイナー」と思われている国や地域のことは、ほとんど触れられていません。また、大変な被害者がでている紛争や災害であるにもかかわらず、人びとに知られていないということだって起こっています。このあたりについては、大阪大学大学院国際公共政策研究科(OSIPP)のヴァージル・ホーキンス先生の著書、*Stealth Conflicts: How the World's Worst Violence Is Ignored*に詳しいので、関心

のある方はぜひ手に取ってください。

いずれにせよ、こう考えてみると、インターネット・メディアの発達が海外への関心の減少につながるという説は、どうも決定打にはなっていないようです。確かに関心が薄れるかもしれません。しかし、むしろ関心が高まるのだとする説にも説得力がある。そもそも、「海外への関心」とはいったい何のことをさすのかという指摘もありました。インターネット・メディアの発達は、若者の内向き論と関係はないまではいいませんが、その内容を検討してみると、これだけでどうこういえるようなモノではないといえます。

2.2 日本人・日本社会

「日本人」あるいは「日本社会」といった、国民性から若者内向き論について意見を寄せていだいた方がいらっしゃいました。

まず、「日本人」としての国民性の議論です。日本人は国民性として、内向きなんだという指摘がございました。もっとも、この国民性をうまく生かして、国際社会に出て行くべきだとあわせて意見を述べられています。また、いまだに一国一民族意識があるという指摘もありました。さらに、内向きの人間にしかできないこともあるんだと、むしろこの内向きをポジティブに捉えた意見を寄せてくれた方もいらっしゃいました。他方、自分の周辺の人間を見渡すと休学をしても留学したいという人がいるので、日本の若者が内向きだという実感はないという意見もありました。

若者の内向き思考について、日本社会に関する論点の提示もありました。日本の大学システムや企業の採用システムが、海外留学に対応していないという指摘がありました。あわせて、こういう状況だと、海外留学への熱意もしばざるを得ず、大学が企業に働きかけてほしいとの注文もございました。さらに、日本にはギャップイヤーがないという指摘もありました。ギャップイヤーと聞いて、あまり耳慣れない言葉だと思った方もいらっしゃるかもしれません。イギリスの大学で見られるもので、高校を卒業してから大学入学まで一定期間の猶予を認めてもらって、ボランティアや海外留学、インターンシップなどをすることだそうです。日本の大学ではあまり見かけない習慣ですが、日本でも秋学期入学がいろいろな大学でおこなわれるようになると、そのうち流行るかもしれません。

こうした日本人論や日本社会論は、確かに一面をついているように思えますが、注意しないといけないところもございます。日本人および日本社会は内向きであると主張する人は、日本人は外向きの海外の人と違うんだと暗に思っている節があります。それは、もっと主張を展開させていくと、日本人は特異だ、あるいは特殊だといった議論になっていく可能性がある。そうすると、と

どのつまり、「だから、日本人のことは日本人にしかわからない」と、かなり凝り固まった議論になってしまいます。はたして、日本人のことは日本人にしかわからないのでしょうか? そもそも、「日本人」とは誰のことをさすのでしょうか? 日本には、アイヌ、琉球、在日外国人の方々が住まわれていますが、「日本人」とみなさんが口にしたとき、そうした方々を含んでいるのか、それとも排除しているのか? こう考えていくと、結構むつかしいですよね。さきほどお話した「中国人」の問題のように。しかし、これは前回の講義で少し触れた、恣意的な境界線の問題なのです。

ベストセラーになった『敗北を抱きしめて』の著者、ジョン・ダワーさんはこんなことをおっしゃっています。「『日本文化』だと『日本の伝統』だと、そういうものは実際には存在しないのです。実をいうと、『日本』でさえ存在しません。逆に、私たちが語らねばならないのは、『日本文化たち Japanese cultures』であり、『日本の伝統たち Japanese traditions』なのです。私たちは、『日本たち Japans』と言うべきなのです」(ダワー 2004: xvi-xvii)と。ダワーさんは、「日本文化」とひっくりめですべて説明できるものではなく、その複数性を強調しているのです。「日本」と一口にいったって、そこにはいろいろな文化があります。北海道と沖縄では、歴史的背景からいっても、同じ「日本」ですが、人びとがつむぎだしてきた生活のあり方・工夫は異なることでしょう。だから、文化の複数性もみていかないといけない。そう考えると、「国民性」や日本の社会特異性に安易に論拠を求めるほうがよいのかもしれません。

2.3 不況だと海外へ行かない?

みなさんのご意見を拝見していると、不況が関係しているという指摘もいくつかございました。不況による不安で気持ちが内側に向かう、あるいは就職状況が厳しいので無難に暮らしていくべきと思っているからだというご意見でした。2008年に海外留学した日本人は、対前年比で約11%減少していると、文科省は発表しています。某通信社は、これは過去最大の減少幅で、文科省は「不況や就職活動の早期化、学生の内向き志向などが原因と考えられる」と分析していると報道していました。

こう聞くと、某通信社が伝える文科省の分析は正しそうに思えます。お金がなければ、たしかに留学はできないでしょう。また、さきほどの日本社会のところでご指摘になられた方がいらっしゃるように、日本の企業の就職システムが海外留学に対応していない。だけど、ちょっと考えてください。少子高齢化というコトバを聞いたことがあると思います。日本の若者の数は減少しているわけです。これはデータとしてしっかりいえること

です。ですから、不況が影響しているという説を否定するわけではありませんが、海外留学の減少幅を額面通り受け取って、文科省の分析どおり、不況や若者の内向き思考が原因なんだといってよいものなのでしょうか。

また、不況が内向き思考を醸成すると、必ずしもいえないと思います。日本が不況ならば、海外に仕事を求めたってよいはずです。実際、自国にしっかりと仕事がないので、海外に出稼ぎに行かざるを得ない人々もいらっしゃいます。海外留学のデータにそうした数値は反映されないのかもしれません、不況と内向き思考を結びつける議論は、その関係性についてもう少し細かい検討が必要で、安易に持ち出すのはどうかと思います。

2.4 データの問題

こうしていろいろ考えてみると、単純に日本人の海外留学者が減っているからといって、日本の若者が内向きだといってしまうのは、かなり問題があるわけです。みなさんのご意見のなかにも同様の指摘がございました。また、「若者の内向き論」は聞いたことがあるが、どのようなデータや統計に基づいているのかですとか、あるいは「最近の若者は～だ」とよくメディアで言われているけど、それは客観的な比較に基づいているのかといった指摘がございました。そこで、少しデータを見てみましょう。

まず、日本人の海外留学者数の推移をお見せしましょう(図1)。これは、文科省が2010年に出した『「日本人の留学者数」について』という資料に載っていたグラフです。さきほど紹介したとおり、2008年の数は、前年に比べてガクンと落ちています。だけど、その2008年の海外留学者

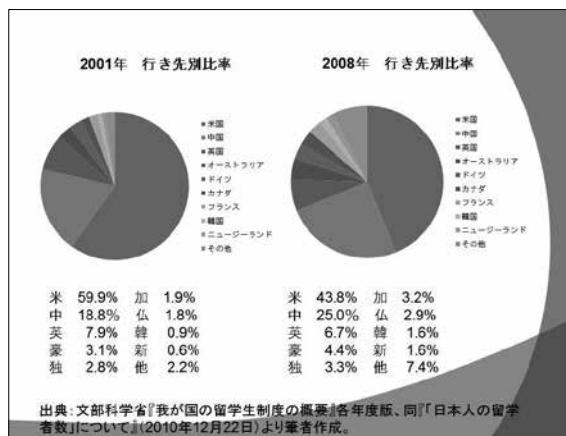
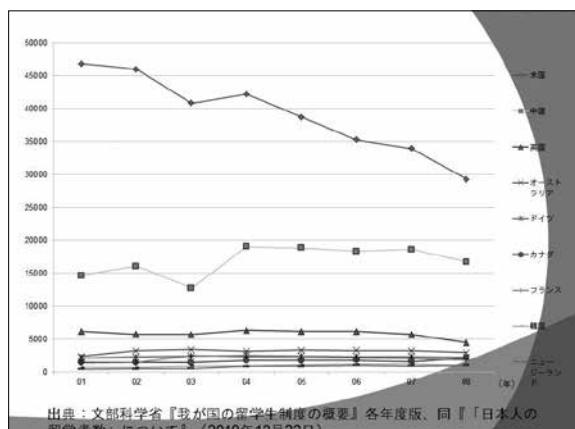
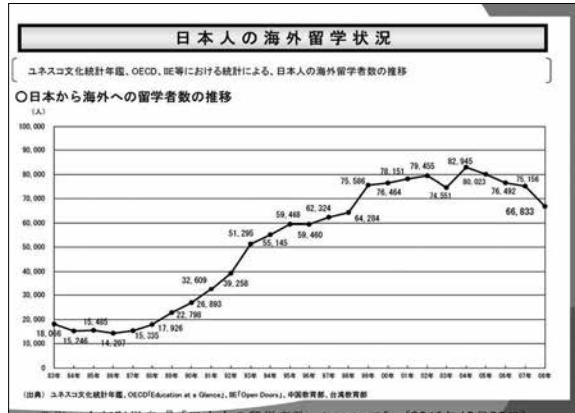


図3: 日本人の主な留学先・留学者推移(2)

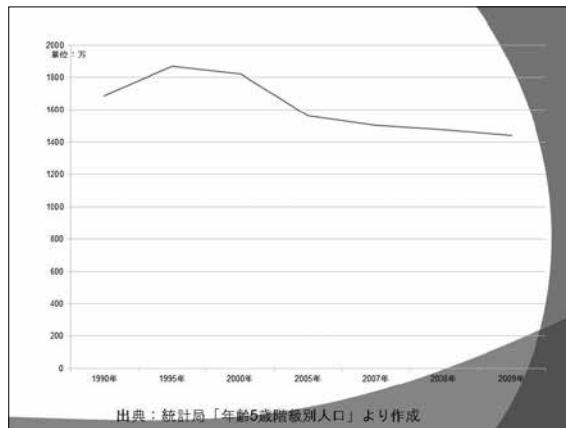


図4: 20代の人口推移

6割がアメリカへ行っていました。しかし、2008年になると、アメリカへ行く人の割合は43.8%です。他方、中国へ留学する人の割合は、2001年は18.8%だったのに対し、2008年は25%。このほかにも、2001年と比べて、オーストラリア、ドイツ、カナダ、フランス、韓国、ニュージーランド、そしてこれ以外の国々へ行く人たちの割合が増えています。減少しているのは、先ほど申し上げましたアメリカとイギリスです。海外留学者の行き先が、米英一辺倒から、多様化しているようです。

最高期に、20代の人口推移のグラフをお見せしましょう(図4)。「若者」をとりあえず、20代の人たちと想定しまして、統計局のデータから拾い出して作成し

数、66,833人は、バブル期といわれている1980年代後半の数と比べれば、かなり多い。1990年の流行語大賞・流行語部門の銀賞は「バブル経済」でした(ちなみに金賞は「ちびまる子ちゃん」でした)。そこで、1990年と2008年とを比べてみましょう。するとどうでしょう。2008年は1990年よりも37,940人、約2.3倍も増えています。

次に、日本人の主な海外留学先・留学者数の推移を見てみましょう(図2)。文科省のデータから2001年から2008年までの数値を拾い出してきました。見てみると明らかですが、アメリカへ留学する人が減っています。他方、中国に行く人は、2003年に谷があって、デコボコしていますけど、2001年よりも2008年のほうが多い。他の国々のデータは、ちょっと線グラフだと見づらいですね。そこで、2001年と2008年を取り出して、行き先別の比率の円グラフで比べてみましょう(図3)。2001年、海外へ留学する人の約

ました。すると、1995年にピークがきて、それ以降は20代の人たちの数が減つていっていることが明らかでしょう。

バブル期の1990年と比べれば、2008年の「若者」の数は減っています。しかし、さきほどお示ししたとおり、1990年と比べれば、2008年に海外留学した人の数が多い。こうやってデータをいくつか見てみると、「今の若者は内向きだ。海外留学に関心がない」という言説には裏づけがあまりないように思えます。だって、今の若者が「内向き」だといってしまえば、いくつかお見せしたデータから、バブル期に若者だった人たちはもっと内向きだったといえるわけです。また、景気が良かったはずのバブル期よりも、今、海外留学している人たちのほうが多いわけですから、不況と内向きの関連性は薄いのではないかともいえてしまいます(厳密にはもっと詳しい調査がないと、なかなか言い切れないのでですが……)。

2.5 海外に行くことへの不安

量的なことについては、とりあえず、このへんにしましょう。次に、内面的心理的なことについて見てみましょう。みなさんのご意見のなかには、今までの文化からいきなり異なる文化へいくことへの不安があるですとか、あるいは最近の世界情勢が恐ろしく思えて平和な日本にいたほうがいいと思うのが本音ではないか、といったご指摘がありました。確かに初めていくところでは、治安や文化・生活習慣などに関する不安が湧いてくるのは、当たり前のことです。私だって、いきなり行ったことがないところへ一人で行けといわれたら、かなり不安を感じます。

とはいものの、これは別に「日本人」に限ったことではありません。どこの国の人びとでも、はじめて日本に行くことになれば、文化はどうなのかとか、何かあった場合どこに助けを求めればよいのかとか、治安がいいとは本当なのかとか、同様の不安を抱くはずです。ですから、こうした海外に行くことへの不安は、日本の若者の内向きを説明するにはちょっと力が足りないような気がします。

また、海外へ行く不安は、自分が行くところに滞在経験があったり、あるいはいま現地にいる先輩、友達、先生、専門のスタッフなどに話を聞くことで、払拭はできませんが、かなり軽減されるはずです。情報を念入りに手に入れて行動することで、不安はある程度軽減されますし、トラブルにまきこまれるリスクを減らすことができます。海外留学を考えている方がいらっしゃったら、ぜひ、信頼できる方から話を直接聞いてみてください。

2.6 語学力・コミュニケーション力

語学力・コミュニケーション力の問題についても、とりあげる方がいらっしゃいました。ですが、このファクターも若者の内向き傾向とのつながりについては、賛否両論でした。内向きにつながるという指摘には、うまくしゃべれないとはずかしいですとか、言葉の違いを恐れているというご意見がありました。他方で、海外留学制度が整い、英語教育も進んだ現在においては、むしろ海外に興味を持つ人が増えているのではないかという指摘もございました。どちらの意見も、その通りだと思いますが、このファクターも若者の内向き傾向と指摘されるものとの関連は、正確なところよくわからないと思います。

語学力やコミュニケーション力の問題に関連したものとして、日本の英語教育の問題があると思います。「日本人が、英語が出来ないのは日本の英語教育がよくないからだ」という、これまたよくメディアでお目にかかる主張です。英語が出来ないという根拠として、よくあげられるのが、TOEFLやTOEICのスコアです。そして、「英語ネイティブ」に通じる英語をどう涵養していくのか、喧々諤々の議論がずっとつづいていますし、いろいろな教材も売られています。まあ、英語はできたほうがいいでしょう。ですが、ここで問題にしたいのは、英語教育の議論で登場する「英語ネイティブ」という人たちは、アメリカ人、イギリス人、アメリカ人、ニュージーランド人、オーストラリア人を暗に想定しているということです。日本の英語教育の議論は、どうも「英語」＝「西洋で話されている言語」という想定が暗くなされているような気がします。英語はアジアの国々、インド、シンガポール、フィリピン、ブータンなどでも話されていますが、英語教育の議論ではあまりこれらの国々の人たちがでてこない気がするのです。英語教育が世界の多様性への認識に目がいっていない、あるいは多文化共生には行きつかないように思えるのです。若者の内向き思考とはちょっと離れた話題ですが、共生や「足元の国際化」を考えるうえで関連する問題ですので少しだけ言及しました。

2.7 「若者」というカテゴリー

話を元に戻しましょう。若者の内向き思考への批判として、「若者」とひとくくりにして論じて良いのか、「日本の若者」というコトバは漠然としすぎているというというご意見がありました。これは、非常に鋭い問いただと思います。

そもそも「若者」とは一体誰のことなのでしょうか。「若者」と呼ばれている人たちの「若者論」よりも、いい歳をした「大人」の「若者論」のほうが、メディアにおいてかなり有力な力をもっているのが現状です。こうした「大人」の「若者論」において、「若者」は理解できない他者として位置づけられているものが多いと思います。こういえるのかもしれません。「若者論」とは、ある意味では、

自分とは異なるカテゴリーをつくり出し、排除し、支配する知的プロセスの一環などだと。だからこそ、自分たちとは異なる点を、大げさにクローズアップするのでしょうか。

みなさんからいただいた回答のなかには、バブル処理を正しく行わなかつた年齢層の評論家たちに、若者は内向きだといわれる筋合いはないというご意見がありました。世代間対立を煽るつもりはありませんが、「若者論」を振りかざす「大人」たちは、長く生きてきた分、「若者」に対して背負うべき責任もあると思います。

3. まとめと予告

さて、ここまでみなさんからいただいたアンケートの結果をもとに、「若者の内向き論」について、さまざまな角度から検討してまいりました。たしかに、内向きなのかもしれないけれども、データ的な裏付けはあまりないですし、確たる根拠もないようです。そもそも、「若者」って誰なのかまで考え出すと、「若者の内向き論」という議論自体の土台が揺らいできます。

今日とりあげた、「(自分たち)大人」と他者としての「若者」を対比させる「若者論」は、日本国内の話でした。しかし、わりとよく似た構図は、国際関係においても見られます。特に、国際政治・安全保障分野だと、他者としての「敵」をつくり出していく知的な装置が問題となってくるわけです。こうした世界的に広がっている「自己」と「他者」の認識に関して、次回は、エドワード・サイードが提起した「オリエンタリズム」についてご紹介します。

引用文献

ダワー、ジョン
2004 『増補版 敗北を抱きしめて 上』三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店。